

連続講演・シンポジウム

大人と子どもは出会えるかー良い子とは誰か

第三回 自分探しとはなにか
ー自己実現幻想を問う

竹内 常一

(國學院大學教授)

遠藤 昌子

(京都市立伏見工業高等学校養護教諭)

村本 邦子

(立命館大学応用人間科学研究科教授)

滝野 功

(立命館大学応用人間科学研究科教授)

春日井敏之： 3回続けてきました講座も最終回となりました。初回には、竹内先生から少年期の子どもをとらえる視点として身体論、関係論、価値・文化論からとらえていこうという提起があったと思います。2回目は、高垣先生から、子どもと大人のズレをどうとらえていったからいいかという話がありました。自己愛の延長線上で親が子どもを見ていて、子どもの他者性をきちんと認めていないのではないかという問題提起があったと思います。子どもの悪態や暴言を、第二の人生をスタートしようとしている産みの苦しみとして、揺れながら壊れない大人になろうじゃないかと。比べない、脅さない、一部で全体を評価しない、そんな子どもをとらえ方を話されたと思います。

今回は少年期、思春期の論議を受けて、青年期をテーマに3人の方をお願いいたしました。思春期・青年期の中で、「自己実現」という言葉が使われているが、どういう意味で使われているか。自己実現は今の時代、はたして可能なのかといった論議を深めていただければと思います。パネラーとして、遠藤先生は伏見工業高校養護教諭として17年間、定時制の困難な子どもたちと向き合ってこられています。村本先生は女性ライフサイクル研究所を設立され、15年間子どもと女性をめぐる子育てや生き方にかかわる相談活動、講演、研修活動などを継続してこられています。

す。後半のディスカッションの時間を多めにとりたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

滝野功：今回は、パネラーお二人の話を最初にしてもらって、あと竹内先生を交えて話をという案もあったんですが、やはり竹内先生の講演を聞きたいという方もあると思いますので、30分という短い時間ですが、初めにお話をさせていただきたいと思います。後半、質問などを用紙に書いていただいて、また答える形でお話をさせていただけるかと思っております。ではよろしく願いいたします。

講 演

竹内常一：青年期というのはわかりづらい、輪郭のはっきりしないものになってきていまして、いつ終わるかもはっきりしない。いつ始まるかもはっきりしていない。青年期は今の若者から消えてしまったのではないかといった状況もあるのではないかと思います。始まりは思春期ですが、プレアドレッセンスという前思春期を含め、10代すぐからを青年期・思春期と言う人もいるわけです。その分、少年期が短くなっている。少年期後期というのが性的発達が早いわけでしょう。少年期の範疇でつかむより、思春期の前、前思春期として思春期的範疇でとらえた方がいいのではないかという意見もあります。

(1) 少年期・前思春期の親密な仲間

映画「Stand by me」で描かれている男の子たちの親密な仲間(chum)。ギャング集団が壊れていって、数人の同性で同年輩の友だちが出てきて、親密な関係をつくりながら、自分たちの価値世界を自分たちで紡ぎ始める時期ですね。村一番の悪ガキが親密な友だちに、「お前は正義感があっていいよ。すぐ働きに行くのではなく、ちゃんと勉強してやったらどうだ」と言われて、村一番の悪ガキが勉強を始めて、正義感に富んだ弁護士になって殺されるという話があるわけです。

その哀悼のためにもう一人の友だちが、家では嘘八百を並べる子、ストーリーテラーの子どもですが、嘘ばかり言っていて「もっと勉強しろ」と怒られている。そのガキが、「お前の話はものすごく面白い」と友だちが言ってくれて、家では全然否定されている子ども、悪ガキの子どもに別の面で光を当てられ小説家になっていく。小説家になった子どもが町に帰ってきて、自分たちの前思春期のchumとしてのつきあいを回想する。思春期前期の研究をする人は絶対見るべき映画だと思います。

そういう話はトム・ソーヤ以来のアメリカの少年期後期、前期思春期の物語の中にある話だと思います。chumという日本では、ドッグフーズの名前なんですね。商標がありますけど、今のような意味ですよ。「親密な同性の仲間たち」という意味なんです。ギャング集団が崩れてできてくる。そういうものができてくると、グループを時に避難所とし、時にたまり場、ベースキャンプとして、子どもたちは大人、親の保護下や支配下から抜け出していくわけです。この時期の子どもはグループを組んで親の世界から自立していく。一人で自立することはあまりない。一人で自立する試みをするとう困難な道を歩かないといけなことがあると思います。

(2) 思春期・青年期の始まりと終わり

僕はグループで親の世界から離れ始めた子どもたちのところに思春期の始まり、青年期の始まりがあるかなと思っています。これが早くなっていて、10代の始めに思春期が来るとなると終わりはどこか。これがまた難しい。延々と伸びていって、私なども学生に「先生はファッションがいい。先生、なんでそんなファッションするの」と言われます。退職寸前ですので、かなりフリーな服装で大学に行きますから。「今日の服装は女性のファッションの真似じゃない?」とからかわれまして、気がつくと「ちょっと似てるな」と自分でもびっくりしたんですけど。僕だけではないですね。年寄りも若者の真似をして、いつまでも若い気持ちでいる時代ですから。今は老いということを知っている大人がいなくなったんじゃないかと思っています。

ちょっと昔は女性で27、28歳、男性で30歳という言い方がされたと聞いています。一応、社会に出て、自分探し、居場所探しをやりながら、とにかく「ここが自分の座席だ」ということを決めて、そこに腰を下ろして生きてみようかと思うようになる時期という意味です。27、28歳で諦めて結婚する気になるという意味も含んでいるのでしょうか。諦めるのは「明らかに見てとって、出処進退を決める」ということです。諦めて頑張る時期なんです。頑張るというのは「我を人生の場に張る」時期です。努力という意味では全然ないんです。諦めて頑張る時期、大人になる時期。それが日本語の最も深い意味だと思っています。今は両方とも悪い言葉にさせられてしまいましたけど。子どもに、「もう諦めたら」と言っっては怒られますけど。そういう時期が青年期の終わり。エミールもソフィアという女性を得て、青年期を終わるわけです。そういうところと考えていいと思います。

(3) IDカードがない一宙ぶらりんの青年期

しかし、これは大変なことなんです。今の子どもたちは10歳から30歳まで宙ぶらりんの青年期を生きないといけませんので。宙ぶらりんの青年期を生きていくことは並大抵ではないんです。アイデンティティがない。立命館大学の学生というのは仮のIDカードであって、IDカードがない。仮にそういうカードをもらっているだけであって、退学処分をもらったら何も残らない。二部の学生に「君、何してるの」と聞くと、仕事はほとんどフリーターであったりなかつたり。一部の学生にもいますけど、クラスに3人、携帯を使っていいという学生がいます。人材派遣銀行に登録していますので、電話がいつかかってくるかわからない。それがないと仕事にあぶれて授業料払えなくなるというのが3人いまして、「お前たち3人だけは携帯使っていいよ」と公認している学生がいるんです。国學院大學は、第一アイデンティティでは、どうもなさそうなんです。いつか怒った時、「俺は働きたかったんだ。仕事がなかったからやむなく大学に来てるんだ。うるせえ」と言われまして、「申し訳ありません」と言って携帯を認めたわけです。

学校から外れてしまって、フリーター的に生きざるをえない子どもは、IDカードがはっきりしない不安定な中を生きないといけない。二部の学生たちは、「先生ね、真面目だったら二部の学生はできないよ」と言います。不安定な生き方をやっていて、明日仕事がないかもしれない。この不安定の中を生きるは力量がないとできない。「先生みたいなのは、絶対できない」と怒られるんですが。宙ぶらりんの中を生きていくのは訓練をしないとできないんだって。「俺たち、もしかしたら一生、こうかもしれないな。終身雇用の会社員なんか絶対なれないしな」と言われると、今の青年期はすごく辛いと思うのです。学校から追い出されたら安定した職業につくまで、ほんと宙ぶらりんを生きていかないといけない。その中で自分を探しながら、同時に生きるに値する世界を発見して、社会の中に住み込まないといけない。

長い青年期を歩いていく。遍歴放浪していく。新しい誕生があるかどうかかわからない中を歩いていかにざるをえないのが現在の青年ではないかと、限りない共感を感じるわけです。国學院大学の学生というIDに居直ってしまって、現在の世間の常識でこり固まっている学生を見ると、とことんいじめたくなる。ほんとに権力の言葉が完全に彼らを占拠している。教育基本法改正は、たとえて言えば国家が教育国家、道義国家になって国民の前に居すわって、教師はその手下になって道徳を教えるのが教育基本法の改正案でしょう。教育国家、道義国家というのは戦前使われた言葉で、戦後、教育基本法改正の時でも「文化国家」という言葉を使うか使わないか、日本と当時のGHQの間で激しい議論があった。

文化国家は実はナチス・ヒットラーの言葉なんです。「世界に冠たる文化を持つ純粋ゲルマン民族の」と。日本でも「大和民族」と言ってきたわけです。「文化国家」という言葉は、使われていないと思うんです。「文化的な国家」なんです。それ以前のところで教育国家、道義国家と言っていました。大学の神道学科、今は神道文化学科ですが、戦前は道義国家なんです。修身の免許証も出せる科だった。教育基本法が変わることが全然わからない。教育を受ける権利が義務なんだと思っている。国家が握るわけですから、教育を受ける権利なんて考えたこともない。義務だと。「君が教員免許証をとって教師になることは子どもに強制する教育を行うんだから、君は権力者になるんじゃないの」と言っても、「それであたりまえじゃないの」という感じなんです。これが「良い子」なんだね。「良い子」は自分の言葉を、どうも持っていないさそうで、いつも他人の言葉をしゃべってるんじゃないでしょうかね。

(4) 子どもにとって重要な意味ある他者

これはナラティブ・カウンセリングの問題を含みます。この学生は、どういう他人を意識して内側に抱えていて、どれだけ他人の言葉に侵食されているか。その言葉と向き合いながら自分の言葉をどれだけつくっているのか。大人に対して向けた言葉が今で、さっき言った言葉は仲間に言った言葉で、子どもはその間で揺れているなど。こういう見方をする。これは私の見方ではなく、ミハエル・バフチンという、ソビエトからロシアに変わる時代のロシアのルネサンスを迎えている時期の文学研究者の見解です。この人は「人間のどの声も、他者に向けられた声である。たとえ独白にみえるような言葉でも他者に向けられた言葉を人は語る」という言い方をしています。

そういう見方で見ますと、どういう声が聞こえてくるのか。いくつもの声が、一人の中から溢れ出てくるのですが、主として向き合っている人は誰で、抵抗している相手は誰で、一心に求めている相手は誰かなという感じで見ます。カウンセリングの話の聞きますと、子どもを受容することが大事だと言います。それは大事ですが、私は子どもを受容されるのか。この子の中に潜んでいる他者とは何だろうか。この人はどんな他者とのつながりを15年間で経験しているのか。親はその子にとって「重要な意味ある他者」として自分の中に採りこまれているわけで、それは1歳くらいから始まると言われます。親が重要な他者として子どもの中に根づいたら、子どもは一人である能力が身につく。これは1歳だという人がいます。僕は多分そうじゃないかなと思います。

子どもが、親なんか関係なくバアーツと遊びに行く時は、親か根づいて心の杖となり、心の相談相手になっているから出ていくんでしょね。親もとから離れていくのは、小学生だったら2年生くらいですね。自転車に乗って自分の圏域から抜け出して、あちこち探索して回る。小学校2年生が、僕の知っている範囲では迷子が多い。延々と歩いていく。それでも歩いていけるということは、しっかり支えてくれるものが自分の中にあるからです。そういう人は、いろんな他者を内側に採り込んでいながら、いろんな他者との関係の中で、自己・自我をつくりあげていく。

最初は母親が意味ある他者ですが、やがては先生になるかもしれない。さらにはギャング集団になるかもしれない。だんだん年齢が上になるとchumになるかもしれない。カップルの相手になるかもしれない。人は年をとって一人で考える時も、一人では考えていないのではないのでしょうか。誰かと対話している。自己内対話ですから。最も危機的な時には、誰かが出てくるんじゃないのでしょうか。昔好きだった女性とか、親だったりするんじゃないのでしょうか。日本の兵隊は「天皇陛下万歳」と言わないで「お母さん」と言って死んだわけです。その時に、最も原質的な他者が登場したわけです。押しつけられた他者ではなくてね。さらにもっと抽象化されて、ある人は他者を神として抱える人もいますよね。革命家は人民という他者を抱えるかもしれません。

(5) 自分探しは他者との関係の組み直し

教育関係者は、明確ではないけれどいつも自分の中につくっている、築きだしてきた子どもというものと話し合いながら、目の前にいる子どもとつきあっているのかもしれないね。優れた実践家は子どもとつきあう時に、今までの中で印象に残った、手のかかった、その子どもによって自分が打倒されてしまって「俺のやり方はだめだから変えないといかん」と教えてくれた子どもを頭におきながら、子どもとかかわっていくのではないのでしょうか。その時に目の前にいる子どもが見えてくるし、またその子どもによって、自分の中の子ども像が壊されていく、新しい子どもとのつきあいを身につけていく。子どもを受け入れることは、実は私を受け入れてくれるかということでしょうと、僕は考えているんです。

もっとも僕は、もしかしたら戦術的かもしれない。僕が受け入れられるだろうかなと思いつつながら、この子どもの中にいる、とんでもない奴と入れ替わるためにかかわってみようかなど。それは明らかに悪魔祓いみたいなやり方ですけど。カウンセリグをしている意識はないですが、いろんな子どもとつきあっていると、そういう意味では政治的な世界なんですね。精神分析学の本を読むと政治学の言葉が一杯出

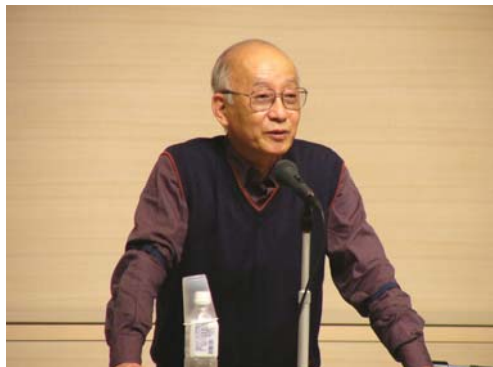
でくるんですね。抑圧なんて、弾圧に近い。僕は、フロイトは心の中の政治学をやった人ではないかという思いで若い頃、呼んだことがあります。そういう意味でフロイトは、マルクスと背中合わせかなと思った時期もあって。対象関係論は、すごいですね。政治学的用語が続々と出てきてスパイとかね。「心の中の他者は、スパイとしての他者がいる」とか。学問的にしゃべれる資格はないんですが。

子どもたちは心の中に、つきあってきた他者との関係がある。それは外的な関係だけではない。常に子ども自身の中に他者を採り込んで内的な関係をつくっています。子どもは学校の先生に出会う時も、過去の先生の10何人かのフィルターを通して先生を見ている。「先公はこんな奴だ」と見ているわけですから。私たちは、自分たちの本体を子どもにわかってもらおうなんて、図々しい話です。そう簡単に子どもに理解されるわけじゃない。彼らは彼らなりに何人もの先生を経験していて、採り込んだ先生、他者としての先生がいる。そのフィルターで見ている。フィルターにはまらない先生として登場したい。その中で外的な過保護な親、過干渉な親とか管理的な教師とか、挑発しすぎるマスコミとかあって、そういうものの中で自分がつくられてきたんだけど、それには代わる他者を探しつつ、他者と呼応する自己を生み出していきながら、自分探しを始める。自分探しは他者との関係の組み直しという関係づくりなんですね。

(6) 子どものコミュニケーションー身体的な応答関係

思春期の最初にchumのような親密な関係が生まれてくる時、それはどうして生まれるのか。偶然で結ばれるのか。だけど最初は、身体の応答ができる子が選ばれるんじゃないかなど。たとえば、プラットホームで足の踏みあいをやっている。一方的に足を踏まれている子もいますけど、あれは彼らの一種のコミュニケーションだと思って見ているんです。一人の子が踏まれすぎるとは、僕は子どもに声をかける悪い癖がありまして、時たま「うるせえ」といわれて、2、3回蹴られそうになったことがあります。子どもに絡むときは、絶対に回し蹴りが入る距離に入らないということを鉄則にしています。本当に信頼できた時に回し蹴りの範囲内に入る。これは子どもに対する尊敬だと思います。子どもに、やや丁寧に「いじめになるんじゃないの」と言っても、「うるせえ」と言われますが、子どもにとってはコミュニケーションだと思うんです。

身体的な応答関係、接触から応答関係を含んでボディコミュニケーションをしていく。今の子どもたちはそれをすごく求めているのだと思う。もっと原質的な身体的接触を求めるのかもしれない。今、学校の先生たちは生徒たちに触られてばかり



いるところがあるんじゃないですかね。こんなに子どもたちが先生の身体に触る、もたれる時代は、かつてなかったと思いますね。この状態は、高校くらいまでいっていますね。大学にもありそうだと言う人もいますけど。

次に、身体間距離をとるとい
うことについて。身体間距離は

離れすぎているか、近づきすぎているか、距離がなくなっている。それは中学生の男女の関係に見事に出てきます。ストレートに身体間距離がなくなってしまう。男と男はそういう関係がない。性的関係がないから同性の親密な関係は愛の関係になるんですね。性がからんできますと、性愛がらみの関係になりますので厄介なんです。中学校でも、子どもの身体間距離がなくなって、悩んでいる先生が一杯います。これも思春期の入口の大変な課題で、へたすると家庭内暴力も、そういったところから生まれてくるのかなといった疑問も持ちながらです。男子のグループと女子のグループからはみ出た子どもたちが、くっつきやすいということは、現場の先生の定式なんです。一つの例として、二人とも同性の関係を失って、異性との関係に入っていくという定式があるようですけど。

個人の身体の問題もありますけど、ボディコミュニケーションという形で、身体の問題が新たな要素を持ち始めて、身体的接触を内に含んで親密な関係が始まっていくわけですね。そういう中で互いを照らし合う鏡となって、親や先生に写っていた自分とは違う自分を写してくれる友だちが出てくる。その時に、新しい自分を友だちが発見してくれる。発見して返してくれて、「私はそんな男だったのか、そんな女だったのか」と子どもたちは考え始めて、互いに評価をし直すわけです。だからね、僕の知っている範囲では、ツッパリの子どもたちが、全然知らないで、原宿で会って、意気投合して安い宿に入って一晩中話をしているという例はたくさん知ってるんですよ。どうして子どもたちはこんなにしゃべるんだろうか。ところが一流校の学生は徹夜で人と話した経験はほとんどゼロです。これはどういうことなんだろうか。どっちが青年なのかと言いたくなるようなデータです。福武書店から調査が出ていますが、20年くらい前、かなり古い頃からその傾向があります。

(7) 固有の意味世界—自分たちの文化・言葉を編み上げる

子どもたちは互いに照らし合いながら、新しい自分を見つけ、さらにその人の中にいろんな問題を投げこんで、再評価をして、今までの意味と違う意味をつくり出し、関係の中で少しずつ、大人から強要されていた意味世界とは違う、自分たち固有の意味世界をつくっていく。「少しずつ」を強調するのは、これは大変なことだからです。今の子どもたちが持っている意味世界は、学校どころではないんですよね。サブカルチャーによって、完全に網をかけられていますから。サブカルチャーを使いながら、逆襲して自分たちのものをつくっていくという感じがあります。だから、外で踊っている学生を見ると、「頑張ってるね」と言いたくなるんですね。「でも飲み込まれちゃだめだよ」と一言、年寄りだから言いそうなんだけど、言わないんですが。

必死で何かの自分の価値世界、意味世界をつくる仕事だと思えますね。身体がやわらかく動いているから、多分見つけていっているんだろうなと思います。

そうして自分たちの文化、さらには自分の言葉を編み上げていく。これが本格的な青年期のテーマだと思います。本格的に行くのは、早い子どもは早いですよ。芥川賞をとるくらいの自分の言葉をつくりあげていきます。多くは遅すぎますね。遅すぎるのは、日本の学校の国語教育が悪いんだと思います。冷たく言うと、文学を読ませる力が学校にはありませんので。国語教育は修身教育をやっているんですからね。中学校になれば先生を喜ばせることは簡単なんです。「走れメロス」の読みなんてのは、教えてもらわなくてもわかっている。私のゼミの学生は全員、高等学校で先生を喜ばせる読みをする手口は全部わかったと言っています。「先生、これを言うと先生の顔が曇るので言わない。そういうのはすぐわかりますよ」と。東大の学生は小学校の段階でわかって、国語の時間は手抜きというわけです。それほど国語の影響力は強いんですよね。

自分の言葉を磨きだすのは大変なことで、しかし自分の言葉と他人の言葉を交わしながら、そこに異なる他者との間に共通語をつくっていく。それが私たち日本人はまだできていないんですよね。今の子どもは一言文で話します。「くせえ」とか言われると落ち込みますが、きっと私たちはカッコいいことを言っているけど、彼らに届かない言葉で、彼らとの間の共通語を持ってないと思いながら、いろいろ考えています。「あ、彼らも弱いのかな、俺たちのツケが皆、行っているのかな」と思いながら、授業中でも怒りそうになりながら我慢するので、ストレスが高いんですが、そういったつきあい方をしています。以上で終わります。

定時制の現場からの発信 生徒たちは・・・

遠藤昌子： 今、皆さんに「こんばんは」と言ったんですが、定時制の子どもは「おはよう」と言って入ってきます。はじめは違和感があったんですが、17年、養護教諭をやっていると、彼らは学校に来るという切り替えで「おはよう」と言ってくれているんだという感じがして、やっと素直に「おはよう」と返せるようになってきた今頃です。

今、「めだか」というドラマをやっているのをご存じだと思いますが、火曜日9時、本来なら定時制の生徒は見られない時間帯ですが、けっこう見てまして「先生、あれ、全然違うぞ。定時制の学校とは雰囲気も違うぞ」。どこが違うのか。あんなに異年齢のおじさんとか、お婆さんとかいっしょやらない。実際の定時制は中学校からそのまま上がって行って（他校を中退した生徒もいますが）、20代前半までなんです。たまにお年を召した方もいるくらいで基本的に同年齢集団です。ドラマでは10何人くらいの編成ですが、勤務校では全校で300人超えていますし、1年生でも40人のクラスです。大変な数でぎゅうぎゅう詰めで授業していることからみると、1年生の生徒は「全然、ドラマって違うな、やっぱりウソやな」と。一度見てみようと思いましたが、たまたま前回、ドラマで殴られた生徒がいて、クラスで「なんでや」と盛り上がるような議論があったんです。実際には議論どころか、あそこまでいけば学校としては卒業してもOKだろうと。「ドラマなんだな」と思う場面です。主役の目黒孝子ですか、あそこまでドジな教師もさすがにいませんので、ドラマはドラマだと思いながら見てたんですが、定時制に光があたる、話題になることはうれしいので、時々チラチラ見てみたいと思っています。

定時制の現場から見ていると、現実の生徒たちは、いろんなところで行き詰まったり、頭をぶちあたりながらも、本当に健気に生きているなと感じます。「学校に来て何か意味があるのか。高校ってなんなん。どうせ俺は定時やし」。必ず入学してきたほとんどの生徒が問いかけてきます。教師はそれにきっちり答えないとイケないのでしょうか。多くの生徒たちは、学校社会に疲れて入学し、今までにいい思い出がほとんどありません。経済的社会的に、生き辛さを背負うものもたくさんいますし、腫れ物にさわるような扱いを受けた子どももたくさんいます。でも彼らは、こうも言うんです。「仲間と思いきり暴れて、中学の頃はものすごく楽しかったぞ。好き放題ができた時代やぞ。今より楽やった」とも言うんです。それも彼らの正直な気持ちで、働きながら学校に通う、働きながらといっても半分くらいは働いてい

て、後の半分は昼間寝ていたりしながら学校に通っている子どももいるんですが。働きながら学校に通うことで、学校が拠り所となり、今は現実に目を向け始めて、向きあうこともあって、別のしんどさを感じ始めているのが定時制の子どもたちかなと思います。

彼らはとても仲間思いです。一晩中、話し続ける。「一緒にいてあげないと、この子はあかんし」と言って話し続けることができる子どもたちです。家に帰らない理由はいろいろな理由があるな、と生徒たちを通して思います。

靈感とか怖いものを信じやすい、そういうこともよく話してきます。仲間内では封建的な関係も彼らはもってまして、先輩から呼び出されると、ご飯を食べていようが、お風呂に入っていようが、すぐ出ていくような絶対服従みたいなのところもあったりします。ケイタイが普及し始めてからは授業中もガンガンなりますし、そのままスッと教室を出てく生徒も増えています。ケイタイで見えないところでつながっていて逃げ場がないなど感じます。ただ3、4年と年数が上がっていったら、定時制の生徒も、どんどん自分で力をつけていくのだと思います。いつのまにか「もう大丈夫やで」と話をしてくれますので、「あ、抜けたな」という感じのすることが多いです。

中高生は生きにくい。まだ大人の方が生きやすい、いろんな経験があるから、先がちょっとはわかっているからということですが、本当に彼らは「どうしていいかわからないということが多い」と言います。ストレートに言葉では言いません。そういう感じをどんどんぶつけてきます。中学高校時代が辛いものになってきているなど、年々生徒を通して思っています。自分のしたいことがわからない、寂しい気持ち癒さないでいます。今までの生活の中で、小さい時から体験して積み重ねてきた、阻害される経験、理不尽なこと、それによって寂しさとか悔しさの積み重ねが、根っここのところに溜まっていき、それに諦めが上乘せされてくるような、重いものを彼らから感じます。

17年前に定時制に来ました。それまでは中学校にいたんですが、定時制に変わった時に思ったことがあります。世の中の常識が引っ繰り返りました。「なんで、ほんと？」という感で生徒や教師たちに返していたんですが、世の中であたえまえたと思っていた事が、実は勝手に大人が、自分たちが都合よく決めていた枠であっ



て、彼らにとって幸せな粹じゃないんだなど。彼らにとって生きやすい粹は別にあるな。常識はどんどん変えていかないといけないものだ、大人もしっかり見なきゃいけないなど感じました。

中学校時代に、とんでもないことばかりしていた生徒に、「今のあなたにあえてよかったわ」と言うんです。目の前に目をキラキラさせていたり、優しい目をしている生徒たちが、過去の自分のことを話してくれるんですけど、本当にいつでやり直せるんだ、いつからでもやり直せるんだなどということ。この大きな二つが定時制で教わったことです。

彼らは仕事をしていますので「おつかれ!」とよく言ってくれるんですよ。「先生、おつかれ!」って、あたたかい言葉で、胃の痛くなるような話とか、教師辞めたいと思うことがあるんですけど、そういう時に「おつかれ!」と言ってけると「もうちょっとやってみようかな」と思いますので、宝物だなと思っています。

生徒の言葉で皆さんに聞いていただきたいのですが、卒業していった生徒の答辞です。「この学校に入学したことで、今まで経験したことがなかった先生と生徒との友だちのような関係をつくることができ、それは先生により印象を持っていなかった私にとって、とつともうれしく、少しずつ学校が嫌じゃなくなってきた(好きになったではないんですね)。入学したての私は、何をすることも真面目にすることもできず、授業中にも大股を開いて座り続ける私は、誰よりも先に先生に注意されました。真面目に振る舞うことが恥ずかしかつたあの頃の私は、常に気を張り詰めていたと思います。周りの人目を、カッコばかりを気にして、本当の自分を出すことができませんでした。あの時、素直になれていれば、どれだけ気持ち楽になっていたかと思います。そして1年が過ぎる頃、私は何に対してもやる気を持つことができなくなっていました。何をしても充実感がなく、友だちの家を泊まり歩き、遊んでいても楽しいとは思いませんでした。その頃、好奇心と時間を潰すために、自分の身を傷つけるようなことをしていた毎日でした。吸いはじめたシンナーは、よく聞く話の通り、始めは1日数時間だったものが、5日もたないうちに私の生活のすべてになりました」と。

「そのうち私も廃人になってしまうかもしれない。こういう生活は恐くてやめたいと何度も思いました。それでも自分一人ではやめることはできませんでした。朝、自分の家に帰ると、母は私を見るなり抱きつき、一言「細くなって」と言いました。その時の私の体重は36キロしかなく、久しぶりに見た母の姿も、いつのまにかとても老けていました。そして母は私に「病院へ行こう」と言い、私は泣きながら「うん」と答えました。あの時、急に家に帰ったのは、母に助け求めたのだと思います。

そして私は母と担任の先生、保健室の先生と一緒に病院に行くことになりました。病院で先生は「クラスの皆に手紙を書かせるから」と言っていました。母も先生も私を入院させる覚悟で、私も立ち直ることができるからと思っていました。でも病院では私のようなケースは入院するのではなく『カウンセリングか、周囲の支えで立ち直るのがよい』と言われました。（実際には病院の受け入れ体制がないということで断られたんです。オロオロしていた母親なんですが、この母親に「自分しかない、この子をしっかりみるんだ」と、この病院に入院できなかったことで自覚をしてもらうことができました。そしてこの母親はこの後、しっかり支えてくれました。）

「今、こうして母の支えと先生や友だちの励ましによって立ち直ることができました。今は真面目であることを恥ずかしいと思うことはありません。途中でやめてしまう人もいますが、定時制の卒業生には他の学校にはない感動があると思います。あまり高校に思い出がないという人も、4年生になると先生方も卒業させたいという気持ちが強く伝わってきて、卒業を迎える頃には大きな思い出になります」。（この生徒はライターのガスを吸ったり、一杯ヘルプを出していたんです。学校の方も「この生徒は1年もたないな」と思っていました。その生徒が、彼氏の存在もあったり、クラスが結構明るい楽しいクラスだったので、その雰囲気もあって、自分で仕事を見つけてくるまでになりました。華奢な子なんですけど、工務店の現場作業で土方をやり始めました。本当におしゃれな子がツナギで泥をつけ学校にくるようになって、でもきれいに化粧していた頃よりも表情もいいし、目もきれいなんです。「きれいになったな」という感じがしたくらいです。事故で途中でやめてしまうことになりましたが、無事、卒業できまして、今は「仕事で一生懸命頑張っている」と、時々訪ねてきてくれます。

定時制の生徒の一片を聞いていただきました。定時制の生徒はどうしていいかわからないことがたくさんあります。消えていってしまいたい気持ちを持っていたり、どうにもでもなれと思う時もあります。大人に熱をもって一生懸命語ってほしい時や、語ってほしくない時もあるんです。彼らははっきりした答えより、しっかり聞いてもらって、一緒に悩んでくれたことに「ありがとう」と言ってくれます。

そばに、いつのまにかいることが最近増えたなと思います。私自身も生徒のそばにいて同じ位置に立ったり、座ったりしながら話をします。まず生徒の横にいて体温が伝わるような関係、これなしにはとても彼らの心は開けないなと思っています。大人の答えは求めていないような気がします。横にいてほしいだけ。家に帰りたくないだけ。寂しくなった時もムカついた時もやってきます。以前は、保健室は

「依存」の方は引き受けましたが、「反発」とかは引き受けることはなかったんですが、ムカついたらムカついたら、「あの先公、ムカつく」と来るんですよ。私にまでムカついているの？というくらい「先生助けて」からありとあらゆるもの、駆け込み寺というか「私は一体何屋さんなの？」というような状態で仕事をしていて「これはプロと言えるのかな」と悩んだ時期もあるんです。そんな形で仕事をしています。生徒が世の中のあらゆるものを、保健室とか学校に持ちこんできているなと思います。

何もできないんですけど、定時制が4年間あるということで、全日より1年長いんですが、4年間で考える。1、2年で成長するのではなく、4年間でうまく変わっていければいいな。「4年で足りなければ何年でも向き合えばいいや」を定時制の教師は合言葉にしています。私たち自身もしんどいので、何回も裏切られ続けると「もう、いいや」という気持ちになるんですが、卒業生や卒業できずに中退していった生徒も、結構来るんですよ、学校に。その元生徒たちが別のものをこちらにエネルギーとしてくれますので、「あ、よかったな」と。そういう形で仕事ができている状況です。

そんな定時制ですが、今、統廃合の話が新聞にも出ています。京都で1997年に、3つの市内の学校が閉校になりました。夜、通いますから遠いとだめなんです。近くで自分が行ける範囲に学校がないとだめなんです。閉校は大人が思う以上にダメージがあります。いろんな思いを持ちながら通っている学校ということで、ようやく世の中がわかってきた時に、フレックスタイム制とか別の定時制の形をとればいいのかと、どんどん変えようとしてきています。フレックス制で、なぜいけないか。皆さんおわかりだと思いますが、人とクラスメートのつながりがないところでは、人として癒されない、次に進めないなというところで考えていただけたらなと思います。

いわゆる「やんちゃな生徒」に目が向きがちですが、おとなしくて自分を出しにくい生徒も多く在籍しています。一生懸命生きている生徒に伝えていきたいと思っています。

滝野功：「大人と子どもは出会えるか」という一貫したテーマでやっていますが、その主旨に沿ったお話をさせていただけたと思います。3回、同じテーマが続いているなということを遠藤先生の話で感じられたと思います。続きまして村本邦子先生、本学の応用人間科学研究科の先生です。

他者と出会い世界と出会う自分探しを一いくつかの「現場」から

村本邦子： 現場からの声。与えられたテーマと現場をキーワードにどんなことを期待されているのかなど考えながら来たんですね。うーん、絞りにくいなと思って、竹内先生のお話をお聞きしながら「ID宙ぶらりん、私のことかも」と思いながら。

自分にとって現場という時、大学では研究と対極にしているんだろうと思うので、自分にとって一番の現場は家族なんですよ。次に研究所の仲間たち、仕事仲間。女性ライフサイクル研究所でカウンセリングをやったり、講座やグループや研修をやったりしています。そこでいろんな話をします。仕事のことも話します。プライベートなことも話します。12人いるスタッフのうち半分が40代で、思春期の子どもたちが全部で15、16人いると思います。自分たちの子どもを通じて見えてくる今の平均的な思春期像が一番思い浮かびます。カウンセリングを通じてお出会いする人たちもいます。NPOの活動で被害者の方たちと直接間接にかかわることがあります。子育て支援を一貫してやってきましたので、子育てをしているお母さんや、乳幼児と子どもたち。子どもにかかわっている保育士、学校の先生たち。スクールカウンセラーもやっていますので中高生とかかわることもあります。先生たちと勉強会をすることもあります。大学、大学院で学生たち、今の学生たちが私にとっては現場です。同僚である大学の先生たち、大学の先生たちって、こんななんだと見ています。最近、加わったのが企業人たち。メンタルヘルスの意識が企業で少しずつ浸透しつつあって、提携が生じてきています。とにかくいろんな立場でいろんな層とかかわってきて、現代を見る時に、どんなふうにつなげて見ていけるのか思いめぐらせています。そういうところの全体から今日のテーマで連想的に考えたことをお話ししたいと思います。

今日のテーマの自分探し、自己実現幻想ですが、最初に聞いた時、「思春期の子は自分探しとか自己実現と言わないよな」と疑問でした。で、自己実現って言うのは誰かなど考えた時、おじさんたちかなと思ったんですね。マズローの自己実現の考え方は経営の方に入っていて、自己実現という言葉が



使われます。最近では主婦たち。インターネットでちょっとした仕事を始める自己実現。ここで言う自己実現という言葉の意味は、楽とか楽しいことをしてお金儲けをするというような意味で使われているようです。その次に使う人たちは大学生にいたのかなと思います。社会に出ていく時、そこの影響を少しずつ受けてきた層のかなと思います。最後に使うのが文部科学省ですね。今の学校教育の場で教員が自己実現を意識して、どんな意味で実践しているのか、いないのか、今日、お聞きできたらと思いながら来たんです。私が現場でかかっている人たちの間で、自分探しとか自己実現ということがテーマになることは思いつかなかったんです。

私は自己実現ということ自体をマイナスに思っているわけではなくて、定義ですよ。何を言おうとしているか。「大人と子どもは出会えるか」ということでも、大人って誰？ 子どもって誰？ と止まってしまうし、お手軽にお金を儲けるのが自己実現だったら「それは違うでしょう」と思うけれども、目的としての自己実現ではなく、結果として訪れる自己実現と言われてきたものはあるような気がする。世の中は都合よく言葉を定義づけるんだなと思っているんですが。

今日は「自己実現幻想」、否定的なニュアンスで使われていると推定しますが、自己へのこだわりということを想定してテーマとして掲げたのかなと推測したんです。自己へのこだわりということではぐしてみると、私の現場でもたくさん見られます。中学、高校、大学でもそうですが、自分へのこだわりにはたくさん出会います。自己へのこだわりを持つのは、ある種、特権性と裏腹のかなと思っています。自分探しという言葉を見て真先に思い浮かべたのが「モーターサイクル・ダイアリー」という映画でした。ゲバラの若い時の旅を描いたもので、これ自分探しの言葉にぴったりかなと。キューバ革命の指導者だったゲバラは裕福な階層の出身で医学部の4年生だった時、男友だちとオンボロバイクに乗って南米を縦断する。無謀な計画を立てて、何か月もかけて世界と出会う。その中で自分が変わるんですね。変容というか、サナギから抜け出る。彼のその後の人生がスタートする。これを見て、まさに自分探しだと思ったんですが、この中で面白いシーンがありました。

旅の途中、彼らがあるインディオの夫婦と出会う。夫婦が自分の土地を追われ、共産党ということで警察に追われて、子どもをおいて逃げている。食べるものにも困るから仕事をしなければいけない。鉱山の仕事でひどい扱いを受けるが、それでもその日の仕事をもらえたらありがたいと。そんな夫婦と、一晚一緒に過ごす。夫婦の身の上話を聞きながら、ある意味で特権的なところにいる若い二人は、「あなたたちも仕事を探して旅をしているのでしょ？」と聞かれて答えられない。躊躇しながら「旅をするために旅をしているんです」と答えるが、そこで夫婦は顔を見合

わせる。何ともいえない雰囲気ですが、軽い侮蔑と呆れと、信じられないという顔。ゲバラたち二人はとても恥じ入る。彼らも命懸けの旅をしているんですが、旅をするために旅をする。自分探しのために旅をする。なんていうか、特権階級ですよ。それに気がつくわけです。たまたまゲバラが富裕階級にある恋人から「マイアミに着いたら水着を買ってきてね」と言われて高額なお金を預かって持っていたのですが、途中死にかけながらも、それには手をつけずに持っていた。途中、彼女から別れの手紙が来るんですが、そのインディオの夫婦にお金をあげてしまうんですね。最後の切り札を持っている自分を恥じる。喘息の薬と最後の切り札の15ドルを手放していく中で世界と出会い、自分を見つける。そういうストーリーなんです。

その中で感動的なシーンはアマゾン川を隔ててハンセン病の施設が隔離されている施設へ泳いで渡るといふものです。誰も泳ぎきったことがない川を泳ぎつく。これはフィクションらしいですが、そこでイニシエーションをやり遂げるといふ感動的な場面があります。裕福な社会の子どもたちは、自分と出会うために外に行かなければならない。よいとか悪いとかではなく、そうなんだなと。日本の若者もそうですよね。バックパッカーはアジアなどへの安いバックツアーが可能になってからの文化だと思いますが、大学生がバックパックでいるんな国を回る。旅する。卒業してワーキングホリディで旅をする。よくも悪くも特権的な人たちなんですよ。今の社会において特権的なところで育てられた子どもたちは、小さい頃から守られすぎていて限定された世界の中でしか生活できない。その中では自分を見いだせない。難しいんですね。自分と出会うために守られた、限定された空間から出て行かざるをえないことがあるのだと思うんですね。

人が自分を感じる時って、どういう時かなと。自分の体験で印象に残っているのは、子どもたちがおなかをいた時に動きますよね。手や足を押しつけてくるんですが、その時に自分も子どもの存在を感じる、身体レベルで。多分、子どもたちも、その時に初めて自分を感じるのかなと。守られた、一体となった世界で自分を感じることはむりなんだと思うんです。反発、自分を動かすことで何かにつかる。壁につかる、そこで自分を感じる、他者を感じるというものではないか。そんなふうにイメージしたんですね。そう考えた時、ある種、特権階級にいる若者たちは反発し、ぶつかって自分や他者と出会うという機会が少ない、乏しいと思います。

自分と出会えない子どもたち、私自身の現場で出会う子どもたちのことが浮かんできます。それは何かというと、他者の目、評価によってしか自分を形づくれない。自分がどう感じているかではなく、人にどう思われているかですよ。子どもたちが二極化している。ある種、特権的な社会の中においてですが、一つの層は下りて

しまった。「このままいってもちょっとだめかな」と思っている。そこから下りてしまうと未来は希望がないというメッセージを、大人が発していますよね。そういう子どもたちも、もう一回建て直すことをするでしょうが、そこまで行くまでの子どもたちは「下りてしまったら希望が持てない」と思っています。未来に希望がなければ今を刹那的に楽しむということで行動化します。長い展望を持って人生を組み立てていくのではなく、刹那的な生き方をしている子どもたちがいると思います。

その反対の極に、逆に注意深く、先の先まで考えて、リスクを侵さないように堅実に賢い選択をして、でもある意味、自分を限定して、こつこつと真面目にきている子どもたち。その子どもたちも背後に、恐れを感じています。「一度この特権性を手放したらもう人間らしい生活はできない」という脅しがある。この二極化は今の時代がつくっている、文部科学省が言うところの「自己実現は自分で頑張る、あとは自己責任だ」という個人主義的な発想で、そこに乗れなかったものたちは排除されるという感じがするんですね。「人として生きたかったら自分で努力しなさい」という自己実現、「それから落ちたら自分の責任だ」と。ホームレスもどんどん増えていますよね。大阪にいるとブルーテントが増えています。そういう人たちは落伍者だというような価値観ですね。

思春期の子どもたちは親から脅されています。「勝ち残らなければ、今の生活を手放すことになる。それでもいいのか」。だからとっても不安で、冒険できないということだと思います。親たちはある意味、社会の成功者なのです。勝ち組、負け組と、なぜ言われるのかわからないのですが、人に勝ち負けなどあるのかなと思いますが、私自身は新人類の先駆けなんです。私は同じ世代からするとちょっと古い世代に属していると思いますが、共通一次偏差値のあたりから、勝ち組、負け組の発想につながっていくのかなと思うんですが、勝ち組の親が、子どもたちに「勝ち組になれ」というメッセージを送っているのが見えてきます。

そこに親たちの自己愛を感じます。自己愛の延長としての子どもです。子育てをしているお母さんたちは、子ども同士、幼稚園や学校で、わが子の受けた仕打ちに傷つきます。子どもの気持ちを飛ばして親が傷つく。子どもの気持ちよりも親が傷ついて、泣いたり喚いたりする。子どもという存在を見ないで、親の自己愛の延長として子どもがいるという気がします。そして挙げ句の果てが、傷つきやすい子どもたち、傷つくのが怖い子どもたちが生まれる。私自身はトラウマについて長くやってきました。傷つきブーム、トラウマブームと批判的に言われていますが、ちょっと違うなと私は感じています。トラウマのことをやっていて思うのは、傷つきと上手につきあうことができることが重要だと思います。昔は「傷つきなんか気にす

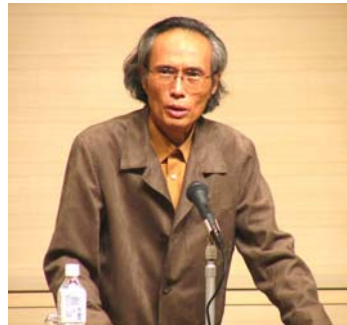
るな」と言っていた。扱いそこねた傷つきが一杯になって、傷つきは悪いことだから傷つかないように。そうじゃない、傷つきと上手につきあうことを教えることが重要だと思います。アリス・ミラーは「傷つくことが悪いのではなく、傷ついた後に、それを表現して、他者が共感する。それでOKだ」と言っています。傷つくのが怖い、自己愛の延長として子どもたち、そこから抜けられない子どもたちが見えてくる気がします。

そして今の若者たちの足掻きがあって、そこから何とか新しい価値をつくっていかようとするのが若者たちですが、そういう権力構造を見てとることをしなければ、どこまでたっても特権階級の私、自己、自分探しだろうと思います。そこを突破して社会に開けていくところに、本当に自分を探し、他者と出会う、世界と出会うということがあるのかなと思います。

滝野： ありがとうございます。

パネル・ディスカッション

滝野： 自分探し、「自己実現」をインターネットで検索すると日本語だけで100万件ありました。自己実現センター、人材派遣会社とか一杯あって、言葉の氾濫になっていて、それに対する批判もありまして、もうフレッシュな言葉ではなくなっているのではないかと思います。小学校では自己実現という言葉は使いませんが、夢を叶える、夢を持つということでしょうか。テーマとして、こうした自己実現と関連させるのは安易すぎる部分もあるんですが、そのあたりも含めて、はじめに竹内先生から問題提起、コメントをいただければと思います。



はじめに竹内先生から問題提起、コメントをいただければと思います。

竹内： 自己実現とか自分を掴むということは日本では大正期くらいから始まると思います。本を読んで内面を追求しながら大きなものをつながっていく。最近の教

育の世界における自己実現、自分探しというのは、出所は明快なんです。それは、中央教育審議会答申で、「教育とは自分探しの旅を助けるものである」と明快に規定しているわけです。今の文教政策はすべて「自分探しの旅」を助けるものになっている。総合高校がどんどん選択肢を増やしているのは、自分でカリキュラムをつくって自分探しをやりなさいということです。だからいかんといっているのではなく、事実としてそうなっていますね。

この路線上に、キャリア・エデュケーションが強烈に小学校から始まっている。これからキャリア・ガイダンスの講習会がどんどん行われていくと思います。総合学習の本音は、一人ひとりに学習プランをつくらせてキャリア・ディベロプメントのプランニングをつくらせて勉強させるのが、文部科学省が考えていることだと思います。子どもが自分で個性をつくる、自分を探して、よりよい売り物にすることが強制されていると思う。かつてのような一律的、画一的な基準での競争もまだ残っていますが、自分自身で個性的、個別的な人間を生み出して。日本でもいわゆる「アメリカンドリーム」をどんどん実現していくんでしょね。イチローをはじめ「アメリカンドリーム」のモデルはあるんだと。

僕がつきあっている子どもたちが困っているのは、都立高校の入学試験で、中学生が自己PRを書かないといけないことです。自分をPRする。真面目な子ども、ちゃんと考える子どもほど、悩んでしまって書けないんですよ。書けないうちに締め切りがくる。そういう事態が起こってきている。主として、そういう流れの中で「自分探し」という言葉が出てきています。「自己実現」が、こうした自分探しの文脈の中で、もう一度読み直されて出てきているのです。

もう一つ、「心のノート」は、まさに「自己実現」ですよ。自分を反省して自分の本当の声を聞きなさいと。本当の声はあなたの命の輝きです。命の輝きは大きな生命、自然の流れの中に恵まれた一粒のあなたなんです。大きな命に恵まれた小さな命を輝かして、これからも絶え間なく続くであろう命に加わっていきなさい。それを媒介にして自分の所属する集団や国や郷土、国家に対する愛を築いていきなさいと言うのです。「心のノート」の構成は、こういうふうになっているんですよ。そこにも「自己実現」という筋があるわけです。まず、両親の声を聞いてあなたの命を輝かしていきなさいと、家族から入るわけです。

この「心のノート」の構成については、正面から述べられてはいない。教育学の中には、こういう考え方が右にも左にもあるんですね。子どもの命を大事にしていけば理想的な秩序が生まれるとかね。皆が自己実現を求めていけば、いい社会が出てくるとか。本当なんでしょうか。自主性は、ある目的に向かって必然的に流れて

いく。これは、目的論的発想です。自主性は一定の秩序に予定調和的につながっていく。

大正期に自由教育を推進し、そういう考え方を激しく批判した人物に野村芳兵衛という人がいます。これは完全に修身と同じなんだと批判しました。身を修めれば家は治まる。家が治まれば国、天下は治まるという目的論です。「孝」という自然の情の延長上に、天皇に向けての「忠」をおけば、必ず愛国は生まれてくるという論法です。明治20年代、「忠君愛国」か「忠孝一致」かで、大論争があったんですが、忠君愛国は負けたんです。そして忠孝一致が教育勅語をつくったのです。

戦後の民主的な教育も、子どもに自主性を求めていけば民主主義は生まれてくると幻想していたんですね。それだけでは、民主主義は生まれなかったんですね。民主主義に対する深い絶望感を教育しただけかもしれないと、僕は密かに思っていますけど。

教育の議論は自己実現をしていく主体形成の問題です。主体が現実とぶつかりあいながら、予想されていたものとは違う別のものを、本当に意識的に追求していくという強固な主体をつくっていくという課題です。それもうまくいかないほどの絶望と向き合わないといけないということが、教育の中にあまりないんですね。私は、教育学のクサイところが心理学にも入ったのではないかと疑いを持っています。そういう中で、「自分探し」という言葉が、実は本当の自分探しではなく、自分探しをした果てに、思惑通り、手に落としたいという人たちがいるのではないかと疑いを持っています。だから、「自分探し」という言葉には慎重なんです。

自分探しの対比語は何でしょうか。他者探しですか、他者実現ですか。一面ではそうだと思います。自己実現をしようとする人は、他者の自己実現をしないとけませんから、他者と否応なくぶつからないといけない。他者とぶつかった時から、社会をつくっていくわけですから、自己実現は社会づくりだと思いません。自分たちの手で社会をつくることと結び合わなければ、関係づくり、社会づくりでない限りは、自己実現なんてのは、特権者の勝ち組の話であって、定時制に来ている子どもたちの話にはならない。定時制の子どもたちは一生懸命関係づくりをしていきながら、その関係の中で、い



つも豊かな文化をつくろうとしながらつくれないで、自分たちの足場をつくりにくくしながらでも、そこで頑張る中で関係性を深くしていく。自分たちの生きる世界や文化をつくろうとして大変になっているのだと思う。そういう苦しみは、他の青年たちにわからないところがあるかもしれないと思います。わからないというのは、暴論かもしれないしれませんね。今の青年たちは、自分たちの生きる世界や文化をつくろうという思いを、どこかで密かに持っている。しかし、その思いをどこかで切り捨てて、リスクに落ち込まないような生き方をしている気配があると思います。

質問： 他者を引き受けて自分を発見していくのだということですが、今の子どもに他者を受け止めることができるのか。他者を引き受けさせていくために、どのような働きかけが必要なのでしょうか。

竹内： 大学で文学教育をやっていますが、『高瀬舟』に少年の日の思い出があるんですね。その中で、庄兵衛は喜助の話聞きながら自分の生き方が壊されていくんですね。喜助は罪人なのに足ることを知っている。自分は足ることを知らないでいる。自己の倒壊が起こる。喜助の安楽死の話聞きつつ、どうもおかしいと。この判決はおかしいのでお奉行様に聞いてみようか。庄兵衛は、ある意味インテリ臭い、小役人臭いところがあるんですが、自己倒壊をしながら権力の境界を越えて喜助の前に立とうとして、「なお聞きたいという気持ちが残っている」と書いてある。

教師は、境界を超えようとして超えにくいところで苦しんでいる。僕は教員養成で学生を教えながら「君らはいつか、こういう人生を送るよと言っています。学校や教室は、本当の世界が出てくる世界だ。本当の世界に一番資するのが教師だと。福祉の人たちは見かけの現実が割れて、吹き出てくる現実身に身を晒す。向こうの人たちのことがわかってくればわかるほど、自分の身が危ないんだよ。あっち側に与すると潰される。そううまくいかないよ。境界は超えなきゃいかんけど、超えられない辛さがあるんだよ」という話をするんですね。

喜助の話聞いている庄兵衛は、最初は喜助の話に関心が行かない。「私は京都で暮らしていますが、松島の者には京都は辛いところで、働いても働いても金はたまりません」と、奉行を皮肉っている。喜助が、「小さい時、親がいなくなって、犬の子のような暮らしをして、人に助けられて生きようになりました」と話しても、「えっ、お母さん、どうして亡くなったの？お父さんどうしてなくなったの？」とか「一体誰が助けてくれたの？」とか、そういうことを同心庄兵衛は聞かない。

人の話を聞いても、自分のことしか考えられない庄兵衛はどんな人間なのか。最後は喜助の話に入っていくが、最初は人の話を聞いても自分のことしか考えない人間はどういう人間かという授業をやるんですよ。この解釈は国文学の中でも騒動を起こしてしまっていて、12月末に「高瀬舟シンポジウム」をやって、それに参加することになっているんです。

国語のちゃんとした読みができていない。教育は、大げさなことをやることはないですよ。小さなことの積み重ねで子どもは育っていくわけですから、過激なことをやったって、いい教育はできないんですよ。一つひとつのところで庄兵衛という人間の生き方、喜助の語りは奉行との共著ですから、奉行とどういう対論をやって、この物語をつくってきたのかという読み方をさせていくと、他者というものにどうかかわっていくかということが、一つひとつ剥がれていくことを感じるんですね。だからこだわってやっているんです。そういうところからも教師は、大変な問題につながなくても、一つひとつ入っていくことはできると思っています。

子どもの自己実現とかかわっていきながら、彼らの願いにかかわっていきながら、彼の願いを私との関係で、親との関係で、友だちとの関係で実現していく。そのために、どういう関係づくりをしていくのかということに、もう一つの焦点を当てていく。対人援助をする人たちは、彼らと思ってもかけない関係づくりをしながら、関係づくりの中に、今の社会の人間関係とは異質な、もっと生きやすい、互いに生きやすい関係を密かにつくっていく。そこをいつも結びつけながら、一人ひとりの人間の青年期を考えていきたいなということですよ。

質問： 傷つくこと自体を恐れるという若者たちに、傷ついた自分とうまくつきあえる処方箋をいくつか教えてください。先生方は傷つくことはもう恐くないのでしょうか。

村本： 私は今まで傷つくことが怖いとか、恐くないとか、考えたことがないです。傷つく傷つかないは、選ぶことではないと思います。傷つかないことは、生きていく限り選べない。傷つくことを避けるとか、怖いとか、そういうものではなく、傷つきは人生に付きもの、生きている限りあります。傷つくことなく生きることはむりです。ただし、年を重ねるとともに、傷への対処が上手になるかもしれません。自分自身、繰り返し繰り返し傷ついてきましたし、それを切り抜けてもきた。人に助けてもらってきたと思う。思春期は結構しんどかったんですが、一人で悶々としていたところがあると思いますが、大人になって、社会に出て仕事をするようにな

り、いろんなことに対して支えてもらっている実感が積み重なってくるので「また何かあっても助けてもらえるだろう」という楽観があります。

トラウマは傷つきの大きなものですが、自分もいつこんな目に会うかという思うこともある。でも、自分がそんな状況になれば、助けてくれる人もいるだろうと思える。自分は今は援助する側の仕事をしているかもしれないけど、援助される側に回るかもしれない。そういう関係を信じられるという感覚が、仕事をするにつれて増えていっているような気がします。だから、傷ついたら誰かに助けてもらえばいいのだと思います。自分を曝して支えてもらうのです。

質問：ゼミの研究テーマで、大人と子どもの間について研究を始めたばかりですが、思春期以降の子どもたちが引きこもったりすることについて、部屋に一人で閉じこもることこそ問題だと。外に出て社会に主張すべきだということについて、どう思われますか。お話でもバックバックや自分探しを、ある種、否定的に語られていたように感じました。先生の言葉を借りれば、引きこもることも、ある種、特権の表れかもしれません。確かに外国に買い物に行く延長で自分探しをしてしまうことには問題があると思いますが。



村本：私はバックバックやワーキングホリデーを否定したつもりはないです。言いたかったことは、ある種、特権的な社会の中で、もちろん子どもたちが、それを選択して生まれてきたわけではないですが、そこで育った子どもたちが自分探しをしようと思えば、一つの方法としてバックバックとかワーキングホリデーで、

一人で世界に体当たりする経験が、自分探しの一つの有効な手段としてありうるだろうなと思います。それが絶対は思いませんが。ゲバラの「モーターサイクル・ダイアリー」の映画を見た後、考えたんです。ゲバラの親が偉かったなと。どこまでフィクションかわかりませんが、お母さんは彼が無謀な旅をすることを笑顔で見守る。お父さんは最後まで反対するんです。「ちゃんと医学部を卒業してからにしろ」と。だけどいざ出発する時、お父さんは息子に、こう言うんですよ。「羨ましいな。自

分ももう何十年か若ければバイクに跨がって行きたかった」と言って送り出す。親が納得して送り出す。偉いなと。自分が親だったら、笑って子どもを行かせられるかなと考えました。

自己愛の延長としての子ども、と言いましたが、子育てで、子どもに苦勞させたくないという親の考えは間違いだと思っています。子どもに樂をさせてはいけないと思っています。ただし命を捨てさせたらいけないというのがあって。思春期のイニシエーションは命懸けだなと、つくづく思ったんですが、命懸けでも背中を押してやらないといけないのじゃないかなと思ったんですね。実際、自分の子どもたちが、そういうことを言い出すかなと考えてみたんです。この時代の子どもたちなので、高1の息子は「ラッパーになりたい」と言うものですから「高校卒業したらニューヨークにでも行ったら」と言うと、「ニューヨークのラッパーは怖いから、いい」って。エイトマイルのエミネモを見て、すぐピストルが出てくるので、行きたくないようです。それを聞いていた中2の娘が「うち、行く行く」と。男の子の方が怖がりなのかな。実際「行く」と言うか、わからないですが、そういう時、リスクの程度が問題ですけど、ある種のリスクをおかしても子どもたちの背中を押してやらなければならないと思ったんです。ゲバラを観て、そう考えながら帰ったら、人質の香田さんの報道だったんですね。私自身、ショックでした。「なぜこの時期にイラクに」と思うんですが、半年以上前にワーキングホリデーで、言葉のわからない外国にいたら、ニュースも届きにくいし、浦島太郎状態になる。現状認識してなかったんじゃないかと思います。バックパックやワーホリによる自分探しは肯定しています。ただ立ち返る場所を探さないといけないと思うんですね。旅先でワーホリの若い人たちと会うんですが、住み心地のいいところで落ちついてしまうのはちょっと残念やな、とね。どこに戻ってもいいけど、自分の安寧を超えて世界と出会ってほしいなという思いがあるんですね。行けば、それで解決することではなく、行って、どこに着地するかが重要だと思います。

引きこもりは、明らかに特権階級の問題だと思います。でも、特権階級に生まれたことは、子どもの責任ではありません。これまでそうやって育ててきた子どもたちを、いきなり放り出すことは解決ではなく、相応の時間をかけて方向性を見ながら援助していくことが必要だろうなと思います。

質問： 高校を卒業して何の意味があるのかという子どもに対して、どのように教師として応えているのか。関連して私の友だちは2年間、不登校で引きこもっていました。外に出ようと思ったきっかけは大学受験をしたい。それには高校を卒業し

たいと思ったからです。私は学歴社会はいけないとは思いません。それによって救われるし、落ちこぼれます。ただそれがあるから皆が頑張っているのではないのでしょうか。どう思いますか。

遠藤： 定時制高校の生徒は「なんで高校を卒業することに意味があるの？」と最初に聞いてくる。まず、自分で選んで学校に来ていない。高校に対して始めは否定的な子どもが多いわけで、彼らはそういうふう聞いてくるわけです。その時、「高校を卒業する以前に自分で何がしたいの？」「なんでそう言うの？」と聞きます。彼らといろいろ話をしているうちに「学校を、もういっぺん考えてみる、いい機会になる」とか「友だちの関係は、人間関係でごちゃごちゃ思っているんだったら一番いいよ」ということを話しています。本当はもっときちっとした答えを生徒に言わないといけないのですが、「どうして？」とい問いかけから始まって話をしていくことが多いです。



学歴社会、高校卒業するかどうかよりも「大きな目的の中に学校を卒業して、その次のものがあるならば、それはOKじゃないか」という形で見えます。別に高校じゃなくても高校と同じ勉強ができますし、学校に来る意味を自分の中で見つけたらOKだという形で考えています。

滝野： フロアから、1回目から通して聞いて聞きたいということがありましたら、お話ください。コメントでも感想でも結構です。

質問： 前回は参加しました。最近の若いお父さんやお母さんが抗議する時の物腰が喧嘩腰だと。遠藤先生が、言葉による意思疎通がしにくい、対話にならないことが増えていると。竹内先生は国語教育がそうしているということですが、その改善策や日常の中で意思疎通ができるためにはどのようなことが考えられるのでしょうか。

質問： 少年の日の思い出を授業で扱うという話で、子どもと他者を出会わせる時、少年の日の思い出をどう使いながら、子ども自身を他者と出あわせていくかについ

て聞きたいと思いました。

質問： 学生でいると、こういう機会が近くにあるのですが、先生方や保護者の方たちは近くなのではないかな。子育てとか教育の現場にどう下ろしていくか。先生方はどのように思われますか。

滝野： 先生方から、お答えとか補足の点があれば、まとめて言っていただけますか。まず、村本先生から。

村本： コミュニケーションのとれない親というのは本当にそうだと思います。大人になっていないと思うんですね。私自身も自他ともに認める「自己中」ですので、学生たちも納得してくれると思います。人のことは言えないのですが、大人であるということは自分自身を相対化して位置づけるということだと思います。大人たちが自分を相対化して、竹内先生の言葉を使えば「他者に届く言葉」をつくっていく。その作業をしていないからだろうと思います。現場への下ろし方ですが、子育て支援を15年やってきましたが、当初は理想を語っていたんです。これは通じないということがよくわかりました。後半から、戦略を必要とする、方法論を必要とすることがわかりました。昔は最も軽蔑していた一種のハウツウなんですけど、『子育てブックレット』のシリーズを10冊出しました。具体的に、この場面でどんな言葉をかけるか。こういう場面で、どう感じるかを具体的に例示することが大切なんですね。それを通じて考えてもらう。右から左へならえという主旨では書かれていないですが、理想を語る一方で、具体的な方策を伝える、これが外せないなということを年々感じています。このシリーズについては、女性ライフサイクル研究所のホームページをご覧ください。

遠藤： 言葉による意思疎通がしにくいということが、年々、ひどくなってきた。話す言葉は単語ですし、こちらの言ったことが日本語として理解されない。「先生、それ、何言ったん？」という形で返ってきます。私自身、しゃべっているうちに何が言いたかったのかわからなくなってしまうような不思議な会話になってしまっていることが、どんどんひどくなってきているので、竹内先生にこのあたりにふれて、話を聞かせていただきたいと思います。

滝野： 国語力教育の失敗とか、言葉の力云々とかありましたね。

竹内： この頃の学校は悪口を言わないからいけないんです。悪口を全部禁止しているんです。私らの頃は「生まれた豚の子は馬に蹴られて名誉の戦死」という歌がありました。これは、戦争批判の歌じゃないですか。「豚の～はいつ帰る」とか言ってるね。それを警察の前で歌って堂々と帰ってました。こんなに子どもたちがパロディを持たない時代は、珍しいんじゃないですかね。子どもたちは影で悪口を言っているのかもしれないけど、表で悪口遊びをしないですね。

僕は、今でも国語の最初の授業で「ばかやろう！」と言って、学生にものを投げさせるような授業をするんですね。これが学生は、本当にできないんです。「俺、全然、ばかやろうと言われたと思わないよ」とか言いますね。「君の声はあつちに飛んで行って、俺の身体に当たらないんだよ」とか言い返していますが。そういう身体を使っての発話をしっかりやって、少々悪いことも言わせた方がいいんですよ。悪いことをたくさん言って初めて、いいことを言えるようになるんです。

傷つくこともそうですね。傷つけられるという話ばかり言っているけど、当人が相手を傷つけてるんじゃないですか。今の若い人で、友だちをいじめてこなかった人っていないですよ。いじめなくても、観客でいたということも、すでにいじていると考えれば、みんな誰かを傷つけてるんじゃないですか。それを全部潜って、自分がやられた時だけ、傷ついたと言うのはナンセンスだと思うんですよ。

一つ目は、僕は傷つけることは悪いことではないと思うんですよ。上手に傷つけるようにやるとか。僕なんて、下手に傷つけられた時は怒りますよ。「こいつ、うまいな」と思う時は、納得します。少しずつ、少しずつ重荷を背負っていく力を教えるのが教育でしょ。人生の重荷を少しずつ、少しずつ背負わせていくことが、僕は教育の仕事だと思っていますけどね。

二つ目は、お母さんの問題。特に若い人の問題ですけど、大人全体が、人生を愛してないんですよ。母親は人生を愛することを自分の生き方で子どもにわからせ、父親は必要な時には断固人生と戦うことを自分の身体で子どもに教えろと。今、この二つがないんですよ。昔だったらお母さんが針仕事をしている姿を見ただけで、お母さんは充実して人生愛してるんだな、味わってるんだなとかね。その雰囲気の中で横にいる僕も落ち着くなというのがあったと思うけど、今は全部なくなった。なくなったことを悲しむ必要はないので、またつくればいいんですが。われわれ大人が、どう人生を愛するか、どう人生にぶつかっていくかを考えながら、それを子どもに教えていく。マニュアルを教える場合でも、マニュアルだと思っただけいけない。生活の中に「作法」を入れ込むんですよ。「作法」は一つの文化ですからね。これが入るか入らないか、生活の中での文化と文化の戦いみたいになりますか

ら、それを大人が必要な場合には断固として粘る。勿論、子どもとうまく波長の合うような形でやらないといけませんよ。

三つ目は、大人は子どもの心聞きすぎるんですよ。「お前、これ何でやったんだ」、「何でやったか、言えるんだったら、とっくにやらんわ」というのが子どもの本音じゃないでしょうか。なぜやったかわからんからやってるんです。口に出して言えるようだったら、とっくに別のやり方をやっている。「何で俺の腹の内なんか聞くんだよ」というのが、子どもの本音だと思います。大人は必ず、大変なことをやると「何でやったんだ」と言う。それよりも、「今、どういう気持ちなの?」。こっちの方がまだいいですよ。「しまった」とか「悪いことをしたと思っている」とか「今、孤独な気持ち」とか返ってきます。そっちの方がケアでしょう。前者は取り調べだよ。子どもは防衛するに決まっていると思うんですよ。僕はできるだけ横並びになって、子どもと世間話をするを基本にしているんです。子どもの心は、よっぽど仲良くなれないと聞かないということをしていますけど、つい心聞きたくってね。すぐに「ごめんね」とか、学生にも言っていますけど。

親との関係はね、教育の話はきれいごとすぎて、親が信じなくなったということが一つ。僕は若い頃から「子どもの幸せを考えて子どもを育てたら、大体ろくな子どもにはならない」と放言して、よく怒られていました。子どもには悪も教えないとだめなんです。「悪も教えないような子どもの幸せは、面白くないよ」と言っていました。

教育の議論をやる時は、平常心がないとだめなんです。きれいごとをやりすぎるんです。同時に教育は、過激にやってはいけない。いくら思想は過激でも、子どもと付き合う時は、原則として中庸をいかないといけないんです。一時期、高校生を組織して活動させた先生がいます。私はそういう高校の教師たちとつきあった長い経験を持っていますけど、どれだけの高校生が潰れていったかということもよくわかっています。本当に教育は難しいんですよ。

マニュアルの問題でも、「作法」についてだけひとこと。「作法」は一つひとつ意味を持っているんですよ。その時はわからないけど、深い文化的な意味を持っていますから、「作法」が変わると文化が変わるくらいの大きな問題ですから。その意味をしっかりと掴みながら、でも子どもに求める時は過激に求めない、ゆっくり出して。まず自分が守るとかからです。

子どもを育てる喜びをみんなで取り戻していかないといかんと思うんです。子どもを育てる喜びをみんなが、失ってきていると思います。育てる喜びから産む喜びを失ってきている。子どもは神様からの授かり物ではなく、つくるものになってい

るんですね。つくるものは、やめることもできるものなんですね。産むことの大きな変化が、この30年間で起こったために、根源的に産み育て、教えるという体系、文化が壊れたと考えています。今、お父さん、お母さん、先生も含めて、一つひとつ一緒に、その意味を確かめながら育て、教育することの喜びを取り戻さないといかん時代だなと、僕は思っているんです。

滝野： どうもありがとうございました。1回目に出されたテーマに、また戻った感じが最後の話でしました。竹内先生も中庸の大切を話されて、臆病と蛮勇は実は同じなんだと。思想的には過激だけれど、自分は中庸を大切にすると言われました。これは、アリストテレスの中庸論から来ているものらしいですが、思想は過激に、というのは精神の自由ですね。発想の自由を大切にすることが、現実には子どもとつきあう中では慎重に、平常心で日常生活の中でやるべきではないかという、1回目のお話に戻ったような気がしています。

第3回目のテーマである「自分探しとはなにかー自己実現幻想を問う」。これは難しい話です。問いの窓は一杯出たんですが、一体何だったんだということもあるかと思いますが、それはそれでいいと思います。自分で考えていかなければいけないことで、私としては宗教の問題も一つテーマにしたいなと思ったんです。自己実現はジェイムズとかユングも、マズローも宗教的なものと、実は関係がある。そこから出てきていることもありまして、考えていく課題として、残っているのではないかと思います。今回のシンポジウムは、すべて「問い」で攻めてきたシリーズです。この問いを、みなさんにも持って帰っていただき、さまざまな自分の現場で考えて、工夫してやっていただく際の参考になればと思っています。

それではシンポジウムを終わらせていただきます。3人の方に拍手で感謝を表したいと思います。どうもありがとうございました。

最後に人間科学研究所の春日井の方から一言、連続講演・シンポジウムのまとめをお願いいたします。

春日井： 本日で、3回の連続講演・シンポジウムを終了させていただきます。毎回、中味の濃い内容で、帰り道で消化をしながら帰るといふ、そんな感じがしております。今日は「自己実現」が、テーマになりました。特に、現代的な自己実現については、バブル経済崩壊後の90年代以降、文部科学省と財界が強調してきているということ。若者の年収が300万円時代と言われる中、企業は守ってくれない中で、「生涯学習」の言葉とセットで登場してきました。「何回解雇になっても、自

分の中にいいところを見つけて、自己実現できるような生涯頑張り続けなさいよ。その結果は、自己責任ですよ」という脈絡の中で論じられてきている姿が、討論の中で見えてきた気がします。

また、守られ過ぎているような子どもと守られてない子ども、レールに乗せられている子どもとレールすらなく放り出されている子ども。どちらも実は、守られていないのではないのでしょうか。守られ過ぎているような子どもも、実は本当には安心できていない。だから、限界を超えた時に攻撃的になる。攻撃性が、内に向かったり外に向かったりして、問題状況が起きているのではないのでしょうか。

言葉の大事さも言われましたが、青年や子どもたちは大人の使う言葉の嘘、白々しさを感じて言葉を信用していない。横にいてほしい、言葉にならない言葉を感じ取ってほしい、そういう身体的な応答を、本当の言葉として、関係を結ぶ入り口で大人はどう交わしていけるのか。また、それを子どもたちが、内なる自己の言葉として語れるようにどう援助できるのかについて、報告の中にヒントがたくさんありました。

自己実現に関わって、竹内先生は、「他者との関係づくり、社会づくり、文化づくり」という三つの視点から述べられました。これを大人と子どもが、どう共有していけるか。子どもの身体的な応答や子どもの内から出てくる嘘がない言葉を、どう大人が共有していけるか。そんなところが、今後子どもと大人が出会うためのポイントになるのではないかと思います。たとえば、駅で踊ったり歌ったりしている青年たちを、私たちはどんなふうに評価して見ているのか。そういった青年たちが、どんなメッセージを出しながら、仲間とつながり、社会とつながろうとしているのか。そこを再度見直しながら、向き合っていく必要があるのではないかと考えたことを、3回の講演・シンポジウム通じて考えさせていただきました。

人間科学研究所としては、みなさん方からいただいた質問やメッセージを、今後どのように生かしていくのか、宿題として検討させていただきたいと思います。なお、3回の講演・シンポジウムをホームページに掲載し、報告論集も作成いたしますので、またごらんください。この企画には、パネラーのみなさん方はもちろんのこと、学生、院生諸君が約20名ほどスタッ



フとして参加し応援してくれました。最後に、毎回職場・地域・学内から参加していただいたみなさん方に、感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

